

高等学校国語教材としての『新古今和歌集』

長谷川 範 彰

一

高等学校国語科の必修科目である「国語総合」の教科書には、『万葉集』や『古今和歌集』と並んで『新古今和歌集』（以下『新古今集』とする。その他の歌集もこれに準じる）の和歌が教材として掲載されていることが多い。『新古今集』の和歌は中学校の教科書にも載せられているが、古典文法を本格的に学びはじめるのが高等学校からということを考え合わせると、この「国語総合」の時間が『新古今集』という存在を意識してその中に収められた和歌に向き合う初めての機会であるという人も多いだろう。そのような場合、この「国語総合」用教科書に掲載された『新古今集』の和歌がその人の『新古今集』のイメージ形成に大きな役割を果たしているだろうことは想像に難くない。もっといいうならば現代に生きる我々の持つ新古今集像の大きな部分を占めていると考えることもできよう。

本稿では、この「国語総合」用教科書に収録された『新古今集』

二

の和歌にどのような特徴・傾向が見出せるのか確認してみたい。令和二年度現在使用されている「国語総合」用教科書のうち、古典分野の内容を収めるものは二十四種ある。

- ① 東京書籍『新編国語総合』（国総332）
- ② 東京書籍『精選国語総合』（国総333）
- ③ 東京書籍『国語総合古典編』（国総335）
- ④ 三省堂『高等学校国語総合古典編改訂版』（国総337）
- ⑤ 三省堂『精選国語総合改訂版』（国総338）
- ⑥ 三省堂『明解国語総合改訂版』（国総339）
- ⑦ 教育出版『精選国語総合古典編』（国総341）
- ⑧ 教育出版『国語総合』（国総342）
- ⑨ 教育出版『新編国語総合』（国総343）
- ⑩ 大修館書店『国語総合改訂版古典編』（国総345）

- ㉔ 大修館書店『精選国語総合新訂版』(国総346)
- ㉕ 大修館書店『新編国語総合改訂版』(国総347)
- ㉖ 数研出版『改訂版国語総合古典編』(国総349)
- ㉗ 数研出版『改訂版高等学校国語総合』(国総350)
- ㉘ 数研出版『新編国語総合』(国総351)
- ㉙ 明治書院『新精選国語総合古典編』(国総353)
- ㉚ 明治書院『新高等学校国語総合』(国総354)
- ㉛ 筑摩書房『精選国語総合古典編改訂版』(国総356)
- ㉜ 筑摩書房『国語総合改訂版』(国総357)
- ㉝ 第一学習社『高等学校改訂版新訂国語総合古典編』(国総359)
- ㉞ 第一学習社『高等学校改訂版国語総合』(国総360)
- ㉟ 第一学習社『高等学校改訂版標準国語総合』(国総361)
- ㊱ 第一学習社『高等学校改訂版新編国語総合』(国総362)
- ㊲ 桐原書店『新探求国語総合古典編』(国総364)

このうち㉔は大岡信氏の『折々のうた』から『新古今集』の和歌を扱ったもの二編を掲載し、㉕は『百人一首』を、㉖は俵万智氏の随筆を和歌の教材としている。そのため全三十四種のうち㉔㉗を除いた二十一種を検討対象とした。

この二十一種の教科書に一度でも掲載されている『新古今集』の和歌は次の三十一首である。便宜上㉑から㉓の番号を付した(番号の後の括弧内に掲載教科書を前掲の教科書一覧で各教科書に付したアルファベットで記した)。

① (㉔㉕㉖)計四種

春のはじめの歌

太上天皇

ほのぼのと春こそ空にきけらし天の香具山霞たなびく

(春上・二)^①

② (㉑㉒)計二種

百首歌たてまつりし時、春の歌

式子内親王

山深み春ともしらぬ松の戸にたえだえかかる雪の玉水(春上・三)

③ (㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝)計十二種

をのこども詩をつくりて歌にあはせ侍りに、水郷春望といふことを

太上天皇

見わたせば山もとかすむ水無瀬河夕は秋となに思ひけむ

(春上・三六)

④ (㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞)計八種

守覚法親王、五十首歌よませ侍りけるに

藤原定家朝臣

春の夜の夢の浮橋とだえて峰にわかるる横雲の空(春上・三八)

⑤ (㉔㉕)計二種

(千五百番歌合に、春歌)

宮内卿

うすくこき野辺の緑の若草に跡まで見ゆる雪のむら消

(春上・七六)

⑥ (㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟)計十一種

千五百番歌合に

皇太后宮大夫俊成女

風かよふ寝覚めの袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢

(春下・一一二)

⑦ (①計一種)

撰政太政大臣家に、五首歌よみ侍りけるに

皇太后宮大夫俊成

またや見む交野のみの桜狩り花の雪ちる春のあけほの

(春下・一一四)

⑧ (B C O J M N T U X 計八種)

入道前関白、右大臣に侍りける時、百首歌よませ侍りける郭

公の歌

皇太后宮大夫俊成

昔思ふ草の庵の夜の雨に涙なそへそ山時鳥

(夏・二〇一)

⑨ (R S 計二種)

五首歌人人によませ侍りける時、夏歌とてよみ侍りける

撰政太政大臣

うちしめりあやめぞかをる時鳥鳴くやさ月の雨の夕暮れ

(夏・二二〇)

⑩ (P Q 計二種)

題しらず

皇太后宮大夫俊成

たれかまた花たちばなに思ひ出でむ我も昔の人となりなば

(夏・二三八)

⑪ (G H K V 計四種)

(題しらず)

皇太后宮大夫俊成女

たちばなのにはふあたりのうたたねは夢も昔の袖の香ぞする

(夏・二四五)

⑫ (C D E G H J K R S T U X 計十二種)

題しらず

寂蓮法師

さびしさはその色としもなかりけり楨立つ山の秋の夕暮れ

⑬ (C F G H J K M N O T U X 計十二種)

(題しらず)

西行法師

心なき身にもあはれは知られけり鳴たつ沢の秋の夕暮

(秋上・三六二)

⑭ (B C G H I J K P Q T U X 計十二種)

西行法師すすめて、百首歌よませ侍りけるに

藤原定家朝臣

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮

(秋上・三六三)

⑮ (P Q 計二種)

百首歌たてまつりし時

撰政太政大臣

さりぎりすなくや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかもねむ

(秋下・五一八)

⑯ (V 計一種)

題しらず

皇太后宮大夫俊成

かつこほりかつはくだくる山川のいはまにむすぶあか月の声

(冬・六三二)

⑰ (B C I J K M N P Q R S T U X 計十四種)

撰政太政大臣家歌合に、湖上冬月 藤原家隆朝臣

志賀の浦やとほざかり行く浪間よりこほりて出づる有明の月

(冬・六三九)

⑱ (G H 計二種)

守覚法親王、五十首歌よませ侍りけるに

皇太后宮大夫俊成

ひとり見る池のこほりにすむ月のやがて袖にもうつりぬるかな

(19) (D)(E)計二種

百首歌たてまつりし時

定家朝臣

(冬・六四〇)

駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮

(冬・六七一)

(20) (G)(H)計二種

定家朝臣、母のおもひに侍りける春のくれにつかはしける

摂政太政大臣

春霞かすみし空の名残さへけふをかぎりの別なりけり

(哀傷・七六六)

(21) (G)(H)計二種

五十首歌たてまつりし時

家隆朝臣

あけばまたこゆべき山の峰なれや空行く月の末の白雲

(羈旅・九三九)

(22) (O)計一種

旅の歌とてよめる

定家朝臣

旅人の袖吹きかへす秋風に夕日さびしき山のかけはし

(羈旅・九五三)

(23) (D)(E)(R)(S)(V)計五種

東の方にまかりけるに、よみ侍りける

西行法師

年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけりさやの中山

(羈旅・九八七)

(24) (T)(U)計二種

百首歌たてまつりし時よめる

前大僧正慈円

我が恋は松を時雨の染めかねて真葛が原に風さわぐなり

(恋一・一〇三〇)

(25) (B)(C)(D)(E)(F)(G)(H)(I)(K)(M)(N)(O)(P)(Q)(R)(S)(X)計十七種

百首歌の中に、忍恋を

式子内親王

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする

(恋一・一〇三四)

(26) (D)(E)(R)(S)計四種

雨ふる日、女につかはしける

皇太后宮大夫俊成

思ひあまりそなたの空をながむれば霞をわけて春雨ぞふる

(恋二・一一〇七)

(27) (I)計一種

水無瀬恋十五首歌合に、春恋の心を 皇太后宮大夫俊成女

面影のかすめる月ぞやどりける春や昔の袖の涙に

(恋二・一一三六)

(28) (V)計一種

題しらず

定家朝臣

かきやりしその黒髪の筋ごとにうちふすほどは面影ぞたつ

(恋五・一三九〇)

(29) (C)(D)(V)計三種

和歌所歌合、閑路秋風といふことを 摂政太政大臣

人住まぬ不破の関屋のいたびさし荒れにし後はただ秋の風

(雑中・一六〇一)

③① (掲載教科書⑮⑰⑱計三種)

東の方へ修行し侍りけるに、ふじの山をよめる

西行法師

風になびく富士の煙の空に消えてゆくへも知らぬ我が心かな

(雑中・一六一五)

③② (①②計二種)

百首歌よみ侍りけるに

摂政太政大臣

古郷は浅茅が末に成りはてて月に残れる人の面影

(雑中・一六八一)

各教科書の収録歌数ならびに部立ごとの歌数をまとめたものが表1である(部立については春・夏・秋・冬・恋・その他で分けた)。これを見ると最多は⑮⑱の十首から最少は⑰の三首までかなり幅があることがわかる。各教科書の部立ごとの採歌状況を確認すると、「恋」は各教科書に一首乃至三首採られており、「その他」は一首のものが十種、二首が四種、採用なしが七種となっている。四季の歌は「春」と「秋」がどの教科書にも掲載されており、複数首採用しているものもある一方で「夏」と「冬」の歌がない教科書もあり、「春」「秋」重視の傾向が指摘できる。

次に歌人についてみてみよう。各歌人の掲載状況をまとめたものが表2である。採用されている歌人はある程度決まっており、全部で十一人である。時代でいえば藤原俊成、西行から宮内卿、後鳥羽院までとおおむね新古今時代の歌人で固められている。当然といえば当然かもしれないが、『新古今集』には万葉時代以来の和歌も収められており、これらの和歌も『新古今集』の重要な

○表1

教科書	春	夏	秋	冬	恋	その他	計
⑮国総333	2	1	1	1	1	1	7
⑰国総335	2	1	3	1	1	1	9
⑱国総337	2	0	1	1	2	2	8
⑲国総338	2	0	1	1	2	1	7
⑳国総339	1	0	1	0	1	0	3
㉑国総341	2	1	3	1	1	2	10
㉒国総342	2	1	3	1	1	2	10
㉓国総343	2	0	1	1	1	0	5
㉔国総344	2	1	3	1	1	2	10
㉕国総345	2	1	3	1	1	0	8
㉖国総346	1	1	3	1	1	0	7
㉗国総349	2	1	1	1	1	0	6
㉘国総350	2	1	1	1	1	0	6
㉙国総351	1	0	1	0	1	1	4
㉚国総353	3	1	2	1	1	1	9
㉛国総354	3	1	2	1	1	1	9
㉜国総356	2	1	1	1	2	1	8
㉝国総357	2	1	1	1	2	1	8
㉞国総359	2	1	3	1	1	1	9
㉟国総360	2	1	3	1	1	1	9
㊱国総361	1	1	0	1	1	2	6
㊲国総364	2	1	3	1	1	0	8

○表2

歌人	掲載歌	掲載教科書
藤原定家	④ ⑭ ⑲ ⑳ ㉔	BCDEFGHIJKMN OPQRSTU VX
西行	⑬ ⑳ ㉓	BCDEFGHIJKMN OPQRSTU VX
式子内親王	② ⑳	BCDEFGHIJKMN OPQRSTU X
藤原俊成	⑦ ⑧ ⑩ ⑬ ⑱	BCDEFGHIJKMN OPQRSTU VX
後鳥羽院	① ③	BCDEFGHIJKMN OPQRSTU VX
俊成卿女	⑥ ⑪ ⑳	BCDEFGHIJKMN OPQRSTU VX
藤原家隆	⑰ ⑳	BCDEFGHIJKMN OPQRSTU VX
寂蓮	⑫	CDEFGHIJKMN OPQRSTU VX
藤原良経	⑨ ⑮ ⑳ ㉒ ㉔	CDEFGHIJKMN OPQRSTU VX
宮内卿	⑤	PQ
慈円	㉔	TU

構成要素であることを勘案するならば、『新古今集』そのものよりよりも新古今歌風の紹介という意識が強いように思われる。

この十一人のうち登場回数が多い歌人は藤原定家が二十一種全てに登場し、西行の二十種、式子内親王の十九種、藤原俊成の十八種と続き、第九位の藤原良経でも十一種にその名が見える。一方掲載教科書が最も少ない歌人は慈円、宮内卿で二種となっている。また藤原定家の和歌が⑥⑨⑩に二首採用されている以外に一人の歌人が二首以上採用されている例はみられず、一歌人一首が各教科書に共通する原則のようである。これらの数字からいうならば「国語総合」用教科書において『新古今和歌集』の歌人といえはまず藤原定家の名が挙がり、続いて西行、式子内親王ということになるか。また下から三番目の藤原良経でも十一種と半数を超えており、ここまでが「国語総合」用教科書における新古今歌人の定番といえよう。

歌人の性別という観点からみると女性歌人の歌は一首、多くて二首となっている。逆にいうと必ず一首以上は女性の和歌が採用されていることになる。

以上の点をふまえつつ部立ごとの掲載歌の特徴についてみていきたい。

三

まずは「春」の歌からみてみよう。教科書に採用されている「春」の歌は①⑦の七首である。このうちでもっとも多く採用されているのが後鳥羽院の③「見渡せば……」である。霞漂う水

無瀬川の夕景に、秋の夕暮れに劣らぬ美を見出す歌。秋の夕暮れを重視する古典世界の通念は、『枕草子』の「春はあけぼの」の章段をはじめよく知られている。『枕草子』の「春はあけぼの」の章段は中学校の国語の授業で扱われることも多く、学習者にとっても当該歌の前提となる秋の夕暮れを讚美する通念は理解しやすいだろう。作者に着目すると春の部には同じく後鳥羽院詠の①「ほのほのと……」も四種の教科書に採用されている。全二十一種のうち十六種に後鳥羽院の「春」の歌が掲載されていることになり、また、それらの歌はこの中の十四種の教科書で『新古今集』の冒頭に置かれている（残る二種①⑤）は『万葉集』『古今集』『新古今集』の歌集単位ではなく、三つの歌集の歌をひとまとめにしたうえで部立ごとに掲載している。『新古今集』撰集下命者である後鳥羽院の歌を一番初めに置こうという意識も働いているように思われる。

後鳥羽院の③に続いて採用数が多いのが⑥「風通ふ……」である。当該歌の「花」は『新古今集』の排列から「桜」であると考えられるが、初出の『千五百番歌合』では「梅」の歌と番わされている。もともと『千五百番歌合』は歌人たちが後鳥羽院に提出した百首歌を歌合にしたものであり、百首歌という視点からみると、「桜」よりも「梅」と考えた方が相応しい位置に配されている^④。また「香り」とともに詠まれるのは伝統的に「桜」よりも「梅」の方が多い。以上の点から考えて俊成卿女は当初「梅」の歌として詠んだものを『新古今集』撰入の段階で「桜」の歌として解釈したものとみるのが自然であろう^⑤。

授業にあたっては、当該歌の「花」に「桜」説と「梅」説があ

ることを示した上で、和歌集における排列の意味、「桜」「梅」の古典和歌における一般的な詠まれ方、『新古今集』や『千五百番歌合』の成立事情等の「桜」説、「梅」説のそれぞれの根拠を紹介し、また「桜」説の場合と「梅」説の場合の和歌の解釈や印象の違いなどについても考えてもらわなければならない。限られた授業時間の中で紹介すべき情報を取捨選択し、的確に伝えなければならず、授業者泣かせの教材といえようか。

さて、この歌でもうひとつ注目したいのが、「春の夜の夢」という詞である。この詞は八種に採用されている④の「春の夜の……」歌にも用いられており、全二十一種の教科書のうち十九種に登場していることになる。

「春の夜の夢」の用例をみると、

二月ばかり月あかきよ、二条院にて人人あまたみあかし
て物語りなどし侍りけるに、内侍周防よりふして、まく
らがなとしのびやかにいふをききて、大納言忠家これ
をまくらにとてかひなをみすのしたよりさしいれて侍り
ければ、よみ侍りける 周防内侍

春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなくたたん名こそをしけれ
といひいだし侍りければ、返事によめる
（千載集・雑下・九六四）

契ありて春の夜深き手枕をいかがかひなき夢になすべき
大納言忠家

題しらず

（千載集・雑下・九六五）

枕だに知ねばいはじ見しままに君かたるなよ春の夜の夢
和泉式部

(新古今集・恋三・一一六〇)
女みこにかよひそめて、あしたにつかはしける

大納言清蔭

あくといへばしづ心なき春の夜の夢とや君を夜のみは見ん

(新古今集・恋三・一一七七)

などのように男女の逢瀬の意で用いられているものや、

源のおほきがかよひ侍りけるを、のちのちはまからずなり侍りにければ、となりのかべのあなよりおほきをはつかに見てつかはしける
するが

まどろまぬかべにも人を見つるかなまさしからなん春の夜の夢
(後撰集・恋一・五〇九)

(題しらず)

伊勢

春の夜の夢にあひつとみえつれば思ひたえにし人ぞ待たるる

(新古今集・恋五・一三八二)

(題しらず)

盛明親王

春の夜の夢のしなしはつらくとも見しばかりだにあらばたのまむ
(新古今集・恋五・一三八三)

などのように恋しい人を思つて見る夢を指しているものが多く見出せる。いづれにせよ「春の夜の夢」とは恋歌的要素を多分に有する詞といつてよいだろう。春の到来を詠む①や②、散りゆく桜が主役の⑦ではなく、恋歌的情緒の濃厚な歌が多くを占めている点は興味深い。教科書における『新古今集』の「春」の歌は、「春の夜の夢」という詞に象徴されるような恋歌的官能美が特徴といえるだろう。

続いて「夏」の歌の状況を確認してみよう。「国語総合」用教

科書に掲載されている「夏」の歌は⑧と⑩の四首となっている。

古典和歌において夏の景物といえはまず「時鳥」が挙げられるが、「国語総合」用教科書においても⑧と⑨の二首が計十種の教科書に採用されている。この二首が描く、降りしきる雨(五月雨)の中「時鳥」の声が響き渡るという情景はよく詠まれるものだが、採用教科書数をみると⑧は八種、⑨は二種と大きく差がついている。このような差がついた要因のひとつとして藤原俊成の⑧が白居易の詩を本説取りしている点^⑥があると考えられる。教科書の脚注に白居易の詩について触れているものもあるところから、和歌における漢詩の影響を説明する素材として想定されている可能性が指摘できるだろう。

⑧と⑨を比較すると「昔」という詞の有無が大きな相違点として挙げられるが、この「昔」という詞の存在が、⑧が多く採用されているもうひとつの理由として想定できる。この両首以外に採用されている「夏」の歌をみると⑩⑪どちらも「橘」の香に過去を想起するという内容になっている。

「橘」と「昔」の結びつきを決定的なものとしたのは『古今集』所収の、

題しらず

よみ人しらず

さつき待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

(夏・一三九)

であり、その後しばしば「橘」は「昔」と関わらせて詠まれるようになるが、八代集という枠組みでいうと「橘」と「昔」の組み合わせが多数となるのは『新古今集』からである。その意味で⑩⑪という撰歌は『新古今集』の「夏」の歌の特徴をよく捉えたも

のともいえる。

「時鳥」と「昔」の組み合わせは珍しいものではなく、八代集をみて、

奈良の石上寺にて郭公のなくをよめる

(そせい)

石上ふるき宮この郭公声ばかりこそ昔なりけれ

(古今集・夏・一四四)

はやくすみける所にてほととぎすのなきけるをききてよめる
ただみね

昔べや今も恋ひしき郭公ふるさとにしもなきてきつらむ

(古今集・夏・一六三)

裸子内親王賀茂のいつきときこえける時女房にて侍けるを、としへて後三条院の御時齋院にはべりける人のもとにむかしをおもひいでて、まつりのかへさの日かむだちにつかはしける

皇后宮美作

きかばやなそのかみ山のほととぎすありし昔のおなじ声かと

(後拾遺集・夏・一八三)

郭公をまちてよめる

周防内侍

昔にもあらぬ我が身にほととぎす待つ心こそかはらざりけれ

(詞花集・夏・五五)

待賢門院かくれさせ給うてのち、法金剛院にてほととぎすのなき侍りけるに
仁和寺後入道法親王覚性

故郷にけふこざりせばほととぎすたれか昔を恋ひてなかまし

(千載集・夏・五八八)

百首歌たてまつりし時、夏歌の中に

民部卿範光

時鳥なほ一声は思ひいでよおいそのもりの夜半の昔を

(新古今集・夏・二〇七)

題しらず

よみ人しらず

尋ぬべき人は軒端の古郷にそれかとかをる庭のたちばな

(新古今集・夏・二四三)

(題しらず)

よみ人しらず

ほととぎす花たちはなの香をとめて鳴くは昔の人や恋しき

(新古今集・夏・二四四)

といった用例を見出すことができる。しかし歌数としてはそれほど多いわけではない。⁸であるにもかかわらず⁸が多く採用されていることの背景に「橘」と「昔」の組み合わせにみられた『新古今集』の「夏」の歌と「昔」の関わりの影響を想定することも可能であろう。

「国語総合」教科書というフィルターを通してみると『新古今和歌集』の夏は懐旧の季節ということになるだろう。

続いて「秋」の歌の傾向を確認したい。「秋」の歌は⑫⑬⑭であるが、そのほとんどが⑫⑬⑭のいわゆる三夕の歌となっている。三夕の歌の後代の評価・影響を考えるならばその選択の意図については贅言を要しまい。ただ教材として扱う際に注意したいのは、三夕の和歌に詠まれたような情景が『新古今集』の「秋」の歌の全てではないということである。

王朝和歌において秋とは物思いの季節であった。試みに『古今集』をみてみると、

(題しらず)

(よみ人しらず)

大方の秋来るからにわが身こそかなしき物と思ひ知りぬれ

(秋上・一八五)

(題しらず)

(よみ人しらず)

ひとりぬる床は草葉にあらねども秋くるよひは露けかりけり

これさだのみこの家の歌合のうた

(よみ人しらず)

いつはとは時はわかねど秋の夜ぞ物思ふ事の限りなりける

(秋上・一八九)

などといった秋の憂愁の情を詠んだ歌が多く収められていることがわかる。それは後代にも受け継がれ、『新古今集』においても秋の物思いを詠んだ歌を見出すことは容易い。

(百首歌たてまつりし時)

(撰政太政大臣)

おしなべて思ひしことのかずかずに猶色まさる秋の夕暮れ

(秋上・三五七)

秋の歌とてよみ侍りける

宮内卿

思ふことさしてそれとはなきものを秋のゆふべを心にぞとふ

(秋上・三六五)

秋の歌の中に

太上天皇

露は袖に物思ふころはさぞなおくかならず秋のならひならねど

(秋下・四七〇)

秋は涙の似合う悲しみの季節という面を持つ一方で、一年の中でもっとも華やかな時季という顔も有している。現代において色とりどりの植物に彩られた季節といえは春を想起するであろうが、古典和歌において色彩溢れるのは秋といえる。

題しらず

よみ人しらず

緑なるひとつ草とぞ春は見し秋はいろいろの花にぞありける

(古今集・秋上・二四五)

(題しらず)

(よみ人しらず)

ももくさの花の紐とく秋の野を思ひたはれむ人ながめそ

(古今集・秋上・二四六)

題しらず

よみ人しらず

秋の露いろいろごとにおけばこそ山の木の葉の千種なるらめ

(古今集・秋下・二五九)

(これさだのみこの家の歌合のうた)

ただみね

神なびのみむろの山を秋ゆけば錦たちきる心地こそすれ

(古今集・秋下・二九六)

(題しらず)

(よみ人しらず)

秋の野の錦のごとも見ゆるかな色なき露はそめじと思ふに

(後撰集・秋下・三六九)

といった例をみれば王朝和歌において色付く木の葉や秋の草花に野山が鮮やかに染め上げられる様が詠まれていることがわかる。

三夕の歌に戻るならば、この三首は秋の華やかさを排除する一方で憂愁の情を表現することについても抑制的である。華麗と憂愁という伝統的な秋のイメージを背景としつつもそれを前面に出さずに背景に留めたところに新たな秋の美的情景を生み出している。その意味でいえば三夕の歌は新古今時代の達成のひとつであり、『新古今集』を代表する秀歌といえるが、その達成の前提に憂愁や華麗といった伝統的な秋のイメージがあり、また同時代には秋の物思いや色彩に満ちた華やかな情景も詠まれていたという

ことも教材として扱う際には留意すべきだろう。

かなり特徴がはっきりとしている「秋」の歌と比較して「冬」の歌はこれといった傾向を見出すことは難しい。全体を見渡して目を引く点といえは藤原家隆の⑬が大多数を占めていることである。この家隆歌は『新古今集』中の秀歌として評価が高いが、同時に本歌取りを紹介する際にしばしば例として挙げられる歌でもある。

実際この歌を採用した教科書には「志賀の浦や」の歌と本歌を比較して、詠まれている風景の違いを考えなさい」(R⑤)、「昔思ふ」の歌と「志賀の浦や」の歌は、それぞれ先行の作品をふまえてみよう」(㊦㊧)といった学習のポイントに記載するものもあり、本歌取りを説明するための教材として利用されることを期待して掲載されているとみてよいだろう。藤原定家の⑲も本歌取りの例として紹介されることも多いが、藤原家隆作の⑬と採用数で大きく差がついたのは、藤原定家は他の歌が採用されることが多く、なるべく歌人の重複を避けようとした結果と思われる。

歌人という観点からいえば⑬⑱と藤原俊成の歌が二首採用されている点も注目される。この二首は藤原家隆の⑰、藤原定家の⑲と比べるとそれほど知名度は高くない。比較的知名度の低い二首が採用された理由には当時の歌壇の長老であった藤原俊成の作を掲載しようという意図もあったのではないかと推測される。

「冬」の歌の採用基準は歌の内容もさることながら修辞技法や歌人といった面を重視したものといえよう。それは裏を返せば『新古今集』の冬の歌についてこれといった固有のイメージが確

立していないことの現れとみることもできるだろう。

「冬」の歌と同じく一首の採用数が突出して多いのが「恋」である。式子内親王の⑳是全二十一種中十七種に掲載されており、八割超という極めて高い採用率である。これは現代における当該歌の高い評価を反映したものである。また『百人一首』にも収められ広く親しまれている点も加味されているかもしれない。

この歌は従来作者である式子内親王の心情を詠んだものとする解釈が主流であったが、後藤祥子氏はこの歌が題詠であり、「作者自身の経験である必要はない」ことを指摘したうえで、「恋」は男が抱く恋心であり、その「恋」を主題とするこの歌は男の恋歌であると論じられた¹³。この論以降、作者と歌の内容を切り離し、男の立場になって詠んだものであるとする理解も広まっている¹⁴。

現行の教科書がどちらの解釈を前提として採用しているかにはわかには判断しがたいが、考える手がかりはいくつか存在している。この式子内親王歌を載せる教科書の中には「玉の緒よ」の歌の「絶えなば絶えぬ」には、作者のどのような心情が込められているか、考えてみよう」(㊨)「玉の緒よ」の歌の第四句・第五句には、作者のどのような心情が詠み込まれているか、説明してみよう」(㊩)といった学習のポイントを記すものがある。これらを見ると「玉の緒よ……」歌を作者である式子内親王の心情を詠んだものとして理解していると考えられる。

また㉔の式子内親王歌に次ぐ四種の教科書に採用されている藤原俊成の㉕に着目すると、この歌を採用している四種の教科書はいずれも恋の歌が二首掲載されており、もう一首の恋歌が式子内

親王の㉔なのである。ここには男女の恋歌を一首ずつ掲載しようという意図を読み取ることもできよう。とするならばこれら四種の教科書では㉔を女の恋歌とみているということになる。また㉔は藤原俊成が藤原定家母に実際に送った歌であり、この歌の対として掲載されているとするならば㉔も式子内親王自身の恋情を詠んだ歌として理解されていると考えられる。

㉔の採用は、歌自体に対する高評価だけではなく作者自身の恋の思いを詠んだものであるという認識も少なからず影響しているように思われる。もっというならば恋歌は作者の心情を詠んだものを掲載しようという意識をみることでできよう。

最後に「その他」に分類した㉔～㉚(㉔㉕㉖)についてみてみよう。「その他」に含まれる和歌の部立は「哀傷」、「羈旅」、「雑」と多岐にわたっており、それらの内容に統一的な傾向を見出すことは難しい。

しかし、詠歌事情に着目するとひとつの傾向が見えてくる。「その他」に分類した和歌は七首が延べ十七回採用されているが、このうち母の喪に服す藤原定家に藤原良経が送った㉔や西行が旅先の東国で詠んだ㉚㉛の三首が延べ十回採用されている。これら三首は作者が置かれた現実の状況の中で詠まれたものであり、ここには「恋」の歌と同じく作者の心情を詠んだ歌への志向の存在が感じられるだろう。

四

ここまで教科書に掲載された新古今集歌の傾向について部立

とにみてきたが、「春」の歌は『新古今集』撰集を下命した後鳥羽院の歌を採用しようという意識が窺えると同時に恋歌的官能性を纏う歌が多く選ばれていた。「夏」の歌は時鳥の声や橘の香に昔を偲ぶ懐旧の歌が並び、「秋」の歌は伝統に立脚しつつそれを排したところに美を見出す三夕の歌が多くを占めている。このようにある程度傾向のはっきりしている「春・夏・秋」に比べると「冬」の歌に特徴は見出しにくく、修辞技法や歌人といった観点がその撰歌に大きく影響を与えているように思われる。また「恋」や「その他」の歌からは作者の心情を詠んだ歌への志向が窺われるものであった。

当然ながら本稿で確認してきた傾向や特徴が『新古今集』の全ではない。たとえば「恋」の歌に作者の心情を詠んだ歌への志向を指摘したが、新古今時代の和歌は題詠が主流であり、その意味でいえば体験詠重視は当時の実情をそのまま反映したものではない。本稿で指摘した「国語総合」用教科書所収の新古今集歌の傾向・特徴とは多様な面を持つ『新古今集』のひとつの姿なのである。

これら「国語総合」用教科書所収歌は、どのような教科書を作り上げるか、その教科書の中でどのような役割を担うかという観点から収録歌数、部立ごとの配分、歌人といった様々な条件を勘案して選ばれたものであると考えられる。本稿で確認した傾向・特徴は高等学校の国語教育において『新古今集』に何が求められているのかを示すものといえよう。『新古今集』自体や個々の和歌・歌人の研究史の中に今回確認した「国語総合」用教科書所収歌の傾向・特徴を位置付けることによって『新古今集』における

教育と研究の関わりを可視化できるのではないだろうか。本稿では現在使用されている教科書のみを取り上げたが、過去の教科書に遡って掲載された新古今集歌を確認し、またその変遷を追うことよって、国語教育において『新古今集』に何が求められているか、『新古今集』において教育と研究はどのように関わっているかという点をより明確にすることができると思われる。

また本稿では触れ得なかつたが、個々の教科書がそれぞれどのような和歌を採用しているかという視点も逸することはできない。先程と同じく「恋」の歌を例にとるならば、第一学習社から発行されている①①は八割強という極めて高い採用率の式子内親王の②⑤ではなく、『正治百首』において慈円が詠んだ②⑥を掲載している。先に見たように「国語総合」用教科書においては②⑤は作者の心情を詠んだ歌であるという理解が優勢であるとするならば、①①は現実の恋歌ではなく題詠の恋歌を選んだということになる。恋歌と同様に体験詠への志向が看取された「その他」の歌も確認すると①①は、藤原良経が建久二年の「十題百首」にて詠んだ③①が選ばれており、題詠が主流であった当時の実情に即した撰歌と見ることもできる。それぞれの教科書の新古今集歌の傾向・特徴を比較することも国語教育における『新古今集』の姿を考えるにあたっては重要であろう。これらの点を今後の課題として稿を終えたい。

注

(1) 和歌の本文・歌番号等は『新編国歌大観』による。ただし漢字をあてるなど表記を改めた箇所がある。

(2) 『新古今集』の真名序には「斯集之為体也、先抽万葉集之中、更拾七代集之外」とあり、仮名序には「万葉集にいれる歌は、これをのぞかず、古今よりこのかた、七代の集にいれる歌をば、これをのする事なし」とある（本文は『新編国歌大観』による）。

(3) 『新古今集』におけるこの歌の前後は次のとおりである。
霞たつ春の山辺に桜花あかずちるとや鶯のなく（一〇九）
春雨はいたくなふりそ桜花まだみぬ人にちらまくもをし（一一〇）
花の香に衣は深くなりけり木の下蔭の風のまにまに（一一一）

（当該⑥歌）

このほどは知るも知らぬも玉梓のゆきかふ袖は花の香ぞする（一一三）

（前掲⑦歌）

散り散らずおぼつかなきは春霞たなびく山の桜なりけり（一一五）

(4) 久保田淳氏は俊成卿女の「千五百番歌合百首」における当該歌の位置を確認し、その前後の歌の主題がそれぞれ「梅」と「春雨」であることを指摘して、『千五百番歌合』における当該歌の「花」が「梅」であると結論づけておられる（『新古今集歌集全注釈』角川学芸出版、二〇一一）。

(5) 久保田淳氏は「作者が詠出した時、作者自身は少なくとも「梅が香」の意で「花の香」ではないか。それを「桜花の香」としか解しようがない位置に排列したのは新古今撰者だったのではないか」とされる（前掲（4）書）。

(6) 『白氏文集』卷十七「廬山草堂、夜雨獨宿、寄牛二・李七・庾三十二員外」の中の「蘭省花時錦帳下 廬山雨夜草庵中」

(本文は『新釈漢文大系』による)。なお、この詩句は『和漢朗詠集』にも収められている。

(7) 八代集の夏の部をみると『千載集』に六首、『古今集』には三首、『後撰集』『後拾遺集』『金葉集』(※二度本。以下同)『詞花集』に二首、『拾遺集』(※「雑春」巻も含む)に一首の「橘」の歌が収められているが、このうち「昔」とともに詠まれている和歌は、『古今集』『後撰集』『後拾遺集』『詞花集』『千載集』に各一首あり、『拾遺集』と『金葉集』にはみえない。一方で『新古今集』には十一首の「橘」の歌があり、その中で「昔」を詠む歌が九首を数える。

(8) 試みに八代集の夏の部において「時鳥」と「昔」を組み合わせて詠まれている歌の数を挙げると次のようになる(括弧内は「時鳥」を詠んだ歌の総数)。

- ・『古今集』……二首(二十八首)
- ・『後撰集』……なし(二十九首)
- ・『拾遺集』……なし(三十四首)(※「雑春」巻も含む)
- ・『後拾遺集』……一首(二十八首)
- ・『金葉集』……なし(二十三首)
- ・『詞花集』……一首(八首)
- ・『千載集』……なし(二十七首)
- ・『新古今集』……三首(三十七首)

(9) 『17』を掲載した教科書の中には和歌の修辭技法の解説においてこの歌を本歌取りの例として挙げるものもある(⑩)。

(10) 「国語総合」用教科書の中にも和歌の修辭技法の解説において『19』を本歌取りの例として挙げるものがある(⑪⑫⑬)。

(11) 『新古今集』の注釈等をみると「忍ぶ心の苦しさと強さをその極限でうたう」(『新日本古典文学大系』)、「命の氣息を響かせて、哀切さをきわめた全人間的抒情である」(『新編日本古典

文学全集』)等の讚辭が見出せる。

(12) 後藤祥子氏は、⑭の解釈について「式子内親王という生身の女性の感懐として読むことにおおかたの了解」があり、「近現代の新古今集・百人一首両注釈史において、この歌を女の恋心と読む見方」が大勢的であったと述べておられる(後掲(13)論文)。

(13) 「女流による男歌——式子内親王歌への一視点——」(『平安文学論集』風間書房、一九九二)。

(14) 徳原茂実氏「忍ることの弱りもぞする——もう一つの解釈を求めて」(『武庫川国文』四七号、一九九六・三)、石川由布子氏「玉の緒よたえなばたえね……」考(『立教大学日本文学』第八十四号、二〇〇〇・七)等は「男の恋歌」という解釈をもとにそれぞれ⑮について考察を加えている。

一方で、中村文氏「式子内親王と「玉の緒よ」歌」(『新しい作品論』へ)、(『新しい教材論』へ)『古典編2』右文書院、二〇〇三)、平井啓子氏「たまのをよ」の歌——忍恋題の追求(『式子内親王の歌風』翰林書房、二〇〇六)のように「男の恋歌」と考えることに慎重であるべきとの立場も存在する。

(15) この式子内親王歌を教材としてみたとき「女の歌」か「男の歌」かという問題をどう考えるかについては拙稿「高等学校国語教材としての式子内親王「玉の緒よ……」歌」(『立教新座中学校・高等学校研究紀要』第四十九集、二〇一九)において私見を述べた。

(はせがわ のりあき 本学講師)